



故正三位勳二等岸上鎌吉

勳章加授ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク
昭和四年十二月一日

内閣總理大臣濱口雄幸



内閣



内閣文庫第五六

二六三

昭和四年十二月一日

昭和三十二年三月一日

内閣總理大臣



賞勳局總裁



故正三位勲二等岸上鎌吉儀、明治二十四年農商務技師ニ任セラレ次テ水産調査所技師、樺太民政署技師等ヲ兼任シ同四十一年東京帝國大學農科大學教授兼農商務技師ト爲リ水産學講座ノ創設ニ盡カシ之カ設立ト共ニ第一講座ヲ擔任シ一意専心學生ノ指導ニ膺リ昭和

賞勳局

三年退官セリ同人ハ水産學ノ泰斗ニシテ其ノ蘊奥ヲ究メ幾多ノ發表ヲナシテ斯界ヲ裨益セル所尠カラス就中海洋學術的研究ヲ主唱シ海洋調査所ノ設置セララル、ヤ之カ調査ノ方法ヲ創設シ海洋調査事業ノ基礎ヲ築キ殊ニ本邦産珊瑚カ伊太利産ニ比シテ遜色ナキコトヲ世界ニ紹介シタルヲ以テ聲價大ニ揚リ輸出亦増加シ世界總産額ノ九割ヲ占ムルニ至ル又世界市場ニ於テ好評ヲ博シタル

我國養殖眞珠ノ如キハ其ノ研究ノ賜ニ
シテ歐米學界ヲ驚嘆セシメタリ其、他
鰯、鯛、鯉、鮪等本邦主要水産物ニ關ス
ル研究ハ先人未發ノモノ多ク其ノ功績顯
著ノ者ニ候處十一月二十二日死去セル趣
ニ付此際特ニ同日附ヲ以テ旭日重光章
ヲ加授セラレ度此段允裁ヲ仰ク
追テ本件擬敘勲等ニ付テハ主務省
ト協議濟ニ有之候

内閣

改正三位勲二等岸上鎌吉
叙勲一等授瑞寶章

右ハ明治二十二年帝國大學理科大學
動物學科ヲ卒業シ同二十四年農高
務技師ニ任セラル同二十六年水産調
査所、設置ヲ見ルヤ同所技師ニ兼任
セラレ學術的調査ニ從ヒ次テ同三十二
年東京帝國大學講師ヲ囑託セ
ラレ同三十八年ニ樺太民政署技師

文部省

兼任ヲ命セラル同四十一年東京帝國大
學農科大學教授兼農高務技師ニ任
セラル水産學第一講座ヲ擔任シ大正
九年ニ學術研究會議會負、同十四
年ニ帝國學士院會負ヲ仰付ラレ
昭和三年水産學第二講座分擔ヲ
命セラレシカ同年東京帝國大學教授
兼農林技師ノ官ヲ辭シ間モナク
東京帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ
授ケラレタリ

同人ハ水産學ノ泰斗ニシテ常ニ斯學ノ研究ニ没頭シ其ノ蘊奧ヲ極メ幾多ノ研究發表ヲナシ斯界ヲ裨益シタル功績ハ枚擧ニ遑アラサルモ就中節足動物ノ發生、腔腸動物類、甲殼動物類、軟體動物類、魚類特ニ鰻、鯛、鯉、鮪等本邦主要水産物ノ大部分ヲ網羅セル廣汎ナル範圍ニ互ル貴重ナル研究ハ常ニ新機軸ノ理論ヲ以テト先人未發ノモノ多ク殊ニ天然真珠ノ墾ヲ

文 部 省

摩シ世界市場ニ於テ多大ノ聲價ヲ贏チ得タル我國養殖真珠ノ如キハ同人ノ研究調査ノ賜ニシテ歐米學界ヲシテ驚嘆措ク能ハサレシメタリ是等研究ニ關スル業績ハ六十有餘ニ達シ著書三編トシテ發表セラレ常ニ本邦ノミナラス廣ク世界ノ學界ニ寄與シタル所多大ナリトス

同人ハ學術的調査ヲ基礎トシテ水産ニ關スル現行法規ノ制定ニ對シ貢獻

シタル所多ク即チ我國ニ於ケル水産漁業ニ關スル法規ノ初メテ制定セラレタル當時ハ舊習ノ錯雜セルモノアル為其ノ困難ハ想像ノ外ニアリテ法學者ノ頭腦ヲ慳マシメタルモノ尠カラサリシカ同人ノ學術上ノ研究ハ克ク科學方面ヨリ同法規制定ニ對シ確實ナル理論的根據ヲ與ヘ之カ制定ヲ全カラシメタルモノニシテ漁業法中蕃殖保護ニ關スル規定、汽船トロール漁業取締規則制定ニ際シ禁止區域ノ規定、

文部省

瀬戸内海漁業取締規則、其他是等規則制定ノ骨子トナレルモノハ何レモ同人ノ科學的調査研究ノ結果ニ基キタルモノニシテ特筆スヘキ功績ナリトス
又同人ハ前後三十年ノ久シキ間一意専心學生ノ指導ニ膺リ同人ノ薰陶ニ浴セル學徒ハ實ニ二千有餘ニ達シ且農林技師及水産講習所講師トシテ多數ノ技術者ニ對シ多年親シク實地ニ指導シタルカ故ニ凡ソ現時ノ水産技

術者ニシテ直接間接ニ或ハ實地的理論
的ニ同人ノ教導ニ依リ啓發セラレサルモノ
殆ント稀ナリト謂フモ過言ニアラサルヘシ
加之其ノ真摯懇篤ナル態度ハ能ク技
術者ノ範トナリ精神的薰陶上多大
ノ實蹟ヲ擧ケタリ

其ノ他南洋方面ニ於ケル鮪、鯉ノ生物的
研究調査ノ結果同方面ニ於ケル該漁業
ノ調査ヲ主張シ之カ為ニ南洋方面ノ鮪、
鯉漁業ノ調査施行セラレ遂ニ現在ニ於ケ

ル同漁業進展ノ基礎ヲナシ又「ポーツマス」
條約後日魯漁業條約締結ニ當リ
露國ニ使シテ其ノ任ヲ全ウセシ等銳意
我國産業ノ開發ニ盡瘁シタリ
又同人ハ大正十四年 東方文化事業上
海委員會委員ニ任命セラレ第一回總
會ニ於テ上海自然科學研究所豫
備研究事項トシテ「楊子江魚類ノ生
物學的研究」ヲ同人ノ擔當トシテ決
セラルルヤ昭和二年ヨリ二三助手ヲ伴ヒ

一再ナラス、彼地ニ渡リ、濟南事件ノ
 勃發、各地ノ排日運動等ニ邂逅シ
 幾多ノ辛苦ヲ嘗メタルモ上海、蘇
 州、南京、江陰、無錫ノ各地ニ於テ
 揚子江魚類ノ生物學的實地研究ヲ
 行ヒ各種材料ヲ蒐集ノ上解剖實
 驗、寫真撮影、標本作製等ヲナシ
 廣東嶺南大學ニ於ケル南支科學
 研究者ノ會合ニ於テ是等研究ノ講
 演ヲ行ヒ又論文ヲ提出シ多數支那

文部省

學者ト連絡ヲ圖リ歸朝ニタリシカ本
 年八月六十餘歳ノ老軀ヲ提ケテ大
 ナル決意ノ下ニ三度奥支那ノ瘴境
 ニ入り支那側ノ妨害ニ遭ヒシモ屈セス
 能ク妥協ニ努メ上海、鎮江、南京、漢
 口、宜昌、重慶等ヲ經テ十一月五日四川
 省成都ニ到着シ更ニ研究ヲ續行セ
 ントセシニ同地總領事館ニ滞在中不
 幸ニシテ病ヲ得本月二十二日東方文化
 事業上海委員會委員兼研究員タル

ノ職ニ殉シタリ、庶幾ハ同人、敘上ノ如キ
學術上、實地上水産界ニ致シタル世
界的功績、並科學的調査研究ニヨリ
水産法規ノ制定ニ盡瘁シタル功績
我國水産業ノ開發ヲ促シタル功績等
ヲ録セラレ、特ニ頭書ノ通敘勲ノ榮ヲ
與ヘラレシコトヲ茲ニ謹テ奏ス

昭和四年十一月

文部大臣 田中隆三

文部省

農林大臣 町田忠治

外務大臣 男爵幣原喜重郎

岸上鎌吉功績補遺

一、東京帝國大學に於ける水産學に關シテハ初ノ理科大學に於テ水産大意トシテ講義セラル、ニ過キサリシニ同人ハ日露戰爭以後時代、趨勢ト水産學ノ普及達トニ鑑ミル所アリ獨立講座新設ノ要ヲ認メ其ノ實現ニ苦心劃策シ明治四十一年遂ニ之ヲ新設シ見ルニ至ラシメタリ

文部省

一、同人ハ漁業ノ健全ナル普及達ニ一ニ海洋ノ學術的研究ニ待タサハ一カラスルニトシ主唱シ尾ノ道外數ヶ所ニ海洋調査所ヲ設立セラル、ヤ之カ調査ノ方法ヲ創設シ海洋調査事業ノ基ヲ築ケリ

二、同人ハ珊瑚ニ關スル學術的研究ヲナシ本邦産珊瑚カいたり一産ニ比シ遜色ナキコトヲ世界ニ紹介シタリ為ニ本邦産珊瑚ノ聲價大ニ擧リ輸出亦増加シテ今ヤ世界

総産額ノ九割ヲ占ムルニ至リタムハ
實ニ同人ノ研究紹介ニ其ノ端
ヲ開ケんモノナリトス

文
部
省

(甲)

族籍	東京府平民	氏名	岸上謙吉
戸主又ハ戸主トノ積柄			慶應三年十一月四日生
本籍			
現住所	東京府東京市麹町區一番町二九ノ二		
年號	月日	學業官職賞罰等	當該官衙等
明治廿二年	七月十日	帝國大學理科大學動物學科卒業	帝國大學
全	全	大學院入學ヲ許ス	理科大學
全廿四年	十月廿一日	任農商務技師	內閣
全	全	十級俸下賜	農商務省
全	十二月十有	八等官(勅令第二百十五號)	
全	十一月十一日	敘從七位	宮內省
全	三月九日	農商務省列品所委員ヲ命ス	農商務省
履歷用紙			
東京帝國大學			
明治廿四年	十一月廿日	敘高等官七等(勅令第九十六號)	
全廿六年	四月廿二日	水産調査委員會臨時委員被仰付	內閣
全	五月九日	水産調査所取調委員ヲ命ス	農商務省
全	全	水産調査所第一部兼第二部主任ヲ命ス	全
全	十一月十日	水産課勤務	全
全廿八年	二月七日	明治二十年勅令第拾參號學位令第參條ニ依リ茲ニ理學博士ノ學位ヲ授ク	
全	三月日	第四回內國勸業博覽會審査官被仰付	內閣
全	三月日	第四回勸務ヲ命ス	第四回內國勸業博覽會事務局
	四月四日	九級俸下賜	農商務省
	五月一日	兼任水産調査所技師	內閣
	全	敘高等官七等	全
	五月十五日	水産調査會委員被仰付	全

(2)

全廿九年	三月一日	審査事務勉勵ノ爲銀盃一個授與セララル	農商務省
	三月十六日	陸絨高等官六等	第四回内閣勸業博覽會
	四月六日	水産調査所蕃殖部長ヲ命ス	農商務省
	四月廿九日	第四回内閣勸業博覽會審査官トナリ周到綿密能ク職務ニ服シ其勞鈔カラス依テ爲其賞銀盃壹個下賜候事	賞勳局
	五月十一日	絨正七位	宮内省
	十月廿八日	八級俸下賜	農商務省
全三十年	三月十八日	第二回水産博覽會審査官被仰付	内閣
	四月二日	七級俸下賜	農商務省
	六月十二日	審査第三部勤務ヲ命ス	第二回水産博覽會事務局
	全	水産局勤務ヲ命ス	農商務省
履歴用紙			
東京帝國大學			
明治卅年	九月二日	審査第一部長任ヲ命ス	第二回水産博覽會事務局
	九月十七日	審査第三部報告員ヲ命ス	全
	九月廿日	諾威萬國漁業博覽會へ事務官トシテ被派遣	内閣
	全	御用有之歐米各國へ被派遣	全
	十月廿日	事務格別勉勵ニ付銀牌ヲ授與セララル	第二回水産博覽會總裁
全卅一年	一月八日	出發	
全卅一年	七月十四日	諾威國開設萬國漁業會議參列被仰付	内閣
	十一月二日	水産局調査課長ヲ命ス	農商務省
	十二月十一日	陸絨高等官五等	内閣
	十二月廿八日	絨從六位	宮内省
全卅二年	三月十三日	歸朝	
全卅二年	四月五日	六級俸下賜	農商務省
	六月十七日	東京帝國大學理科大學講師ヲ囑託ス	文部省

(乙)

十二月一日	千九百年巴里萬國水產會議名譽委員ニ推舉セラル	
三月十日	瑞典水產會特別會員ニ推舉セラル	
五月廿四日	五級俸下賜	農商務省
六月十二日	明治三十年第二回水産博覽會開設ノ際審査官トナリ職務ニ勉勵其勞鈔カラス依テ其賞トシテ銀牌一箇下賜候事	
十二月日	オスタント萬國海上衛生保險及漁業博覽會ニ日本部設置ノ件ヲ囑託セラル 同上博覽會日本資助員組織ノ件ヲ囑託セラ	
全卅四年 二月五日	瑞典諾威國皇帝陛下ヨリ贈與シタル「サン オラフ」第三等甲級勳章ヲ受領シ及佩用ス	
全卅四年 四月日	千九百二年萬國漁業會議評議員ニ舉ケラル	賞勳局
五月日	千九百二年露京萬國漁業博覽會名譽委員ニ舉ケラル	
六月十一日	標本陳列館委員ヲ命ス	農商務省
七月十八日	陸軍高等官四等	内閣
十月卅日	敘正六位	宮内省
十一月十五日	萬國水産委員曾委員ニ舉ケラル	
十二月廿日	手當トシテ金百二十拾五圓ヲ給ス	帝國大學
全卅五年 一月廿五日	オスタント萬國海上衛生保險及漁業博覽會ノ爲ニ盡力シタル廉ニヨリ名譽賞ヲ贈ラル	
六月卅日	四級俸下賜	農商務省

履歷用紙

東京帝國大學

全	廿六年	二月十七日	第五回内國勸業博覽會審査官被仰付	内閣
全	廿七年	六月廿八日	敘勳六等授瑞寶章	賞勳局
全	八月	日	米國水産會名譽會員ニ推舉セラル	
全	廿八年	二月十日	陞敘高等官三等	内閣
全	廿八年	四月五日	敘從五位	宮内省
全	廿八年	八月三日	兼任樺太民政署技師敘高等官三等	農商務省
全	廿八年	十一月廿日	樺太民政署事務ヲ囑託シ上京中手當トシテ	内閣
全	廿九年	四月一日	金百五拾圓給與	樺太民政署
全	廿九年	四月一日	明治廿七八年事件ノ功ニ依リ勳四等瑞寶章	賞勳局
全			及金八百圓ヲ授ケ賜フ	賞勳局
全			全從軍記章授與	内閣
全		十一月十四日	免兼官	内閣
履歴用紙				
東京帝國大學				
全	明治廿九年	十二月廿日	二級俸下賜	農商務省
全	四十四年	二月十三日	御用有之露國へ被差遣	内閣
全		三月廿六日	東京帝國大學理科大學講師囑託ヲ解ク	東京帝國大學
全		三月廿七日	任東京帝國大學農科大學教授兼農商務技師	
全		年全月日	敘高等官三等	
全		年全月日	本俸五級俸下賜	文部省
全		年全月日	水産學第一講座擔任ヲ命ス	全
全		五月八日	露國ヨリ本日歸朝	
全	四十四年	三月卅日	敘正五位	
全	明治四十二年	四月一日	俸給令改正	
全	明治四十三年	四月一日	俸給令改正ニ依リ五級俸	
全		年八月十六日	陞敘高等官二等	
全	大正元年	七月十八日	敘勳三等授瑞寶章	賞勳局

大正三年四月十六日	賜本俸四級俸	文部省
全四年五月廿一日	敘從四位	
全四年十月十日	大正四年勅令第百五十四號ノ旨ニ依リ大禮 記念章ヲ授與セラル	賞勳局
全五年三月廿八日	海軍水産博覽會審査官ヲ囑託ス	農商務省
全七年一月十日	宮崎縣水産組合第八回水産品評會審査長ヲ 命ス	全
全七年四月廿日	賜本俸三級俸	文部省
全八年一月廿日	陞敘高等官一等	
大正八年四月一日	官制改正	
大正八年四月一日	俸給令改正	
全八年四月一日	賜本俸三級俸	文部省
全八年十月廿五日	敘勳二等授瑞寶章	
履歴用紙		
東京帝國大學		
大正八年十二月廿一日	陞敘高等官二等	
全九年七月三日	布哇へ出張ヲ命ス	文部省
全九年七月十六日	布哇へ向ケ出發	届
大正九年八月十七日	俸給令改正	
全九年十一月二日	布哇及北米合衆國へ出張中ノ處歸朝	届
全九年十一月廿五日	學術研究會議會員被仰付	
全十年二月廿一日	敘正四位	
全十一年三月卅日	賜本俸三級俸	文部省
全十三年七月九日	布哇へ出張ヲ命ス	文部省
全十三年七月廿三日	布哇へ向ケ出發	届
全十三年七月廿五日	學術研究會議會員トシテ布哇へ出張ノ序 ヲ以テ同地ニ於ケル水産動物ニ關スル調 査ヲ命シ手當トシテ金五百圓ヲ給ス	東京帝國大學

前報後
八月廿四日
不
一年七月

全十三年	八月卅一日	歸朝	屆
全十三年	九月十三日	賜本俸二級俸	文 部 省
全十四年	六月廿七日	帝國學士院規定第二條ニ依リ勅旨ヲ以テ帝 國學士院會員被仰付	内 閣
全十四年	七月 日	東方文化事業上海委員會委員トナル	
全十五年	四月二日	敘從三位	
全十五年	十一月一日	上海へ向ヶ出發(對支文化事業上海委員トシテ)	屆
全十五年	十一月十三日	歸朝	屆
大正十五年	十一月廿五日	昭和ト改元	
昭和三年	三月卅日	賜本俸一級俸	文 部 省
全三年	三月卅日	水産學第二講座分講ヲ命ス	全
		分擔講座職務俸金四百圓下賜	
全三年	三月卅一日	依願免本官並兼官	内 閣
履 歷 用 紙			
東京帝國大學			
昭和三年	四月十六日	敘正三位	宮 内 省
		特旨ヲ以テ位一級被進	
全三年	六月八日	帝國大學令第十三條ニ依リ勅旨ヲ以テ東京 帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ授ク	内 閣

内閣文庫第五号

賞勳局
録

一故岸上鎌吉叙勲ノ件
右上奏書及進達候也
昭和四年十一月

文部大臣田中隆三

農林大臣所田忠治

外務大臣男爵幣原喜重郎

文部省

内閣總理大臣濱口雄幸殿

